

特別
寄稿

「宮本常一から学ぶもの」

佐野 眞一（ノンフィクション作家）

宮本常一の評伝『旅する巨人』を文藝春秋から単行本として出版されたのは、平成八（一九九六）年のことだった。それから十二年後のことし四月、同じ文藝春秋から文庫化して刊行されることになった。

単行本として出版されたとき、宮本常一はまだ知る人ぞ知る民俗学者に過ぎなかった。皮肉にも、いわば宮本の代表

作の『忘れられた日本人』の領域扱いされる人物だったのである。

それが十二年経った現在、宮本といえば、日本の村という村、島という島を限なく歩き、そこに生きる人びとの暮らしを正確に記録した比類なき



旅する巨人 (文藝春秋社)

民俗学者だということが、ほぼ人口に膾炙した。

口はばつたいことを承知で言わせてもらえば、十二年前に発表した拙著が、宮本常一の存在に人びとの関

心に向けさせ、宮本常一再発見の端緒になったのではないかと、ひそかに自負している。

宮本への注目の高まりに呼応するように、二〇〇四

年五月、宮本の故郷の周防大島東和町（現・周防大島町）に「周防大島文化交流センター」という施設がオープンした。この施設のなかには、宮本が七十三年の生涯に残した十萬点あまり

の写真が一枚残らず収められている。

また、宮本の生誕百年にあたる二〇〇七年には、周防大島で宮本の業績を顕彰する盛大な催しが開催され、私も記念講演の講師として招かれた。

ちなみに、宮本の命日の一月三十日には毎年、宮本の霊が眠る周防大島の神宮寺で関係者を集めた「水仙忌」が行われており、私も所用がない限り出席している。ことしの「水仙忌」にも出席してきたばかりである。

これらの催しを運営する中核メンバーは、宮本が晩年、後進育成のため故郷につくった完全手弁当の「郷土大学」の人びとである。その事実には、宮本の精神がいまも脈々と受け継がれていることをいまさらながら感じる。

さて、私が宮本常一という人物の存在について初めて知ったのは、宮本の

代表作の『忘れられた日本人』の初版が未来社から出版された昭和三十五（一九六〇）年のことだった。

中学二年になったばかりの頃である。私はその頃、近所の図書館にもぐりこんでは面白そうな本をかたづけしから読破するブッキツチョな中学生だった。

あるとき、しわくちやなおばさんの写真が表紙になった本が目についた。それが『忘れられた日本人』との最初の出会いだった。宮本常一という著者がどんな人なのか、民俗学がどんな学問なのか、まったく知らなかった。

『忘れられた日本人』を初めて読んだ昭和三十五年は、日本列島に「政治」と「経済」の高波が一気に押し寄せた時代だった。

国会周辺では「安保反対」を叫ぶ学生デモが連日のように繰り返されていた。敗戦後十五年経った日本は、日米関係をめぐって大きな政治対立の時代に入っていた。

一方、経済に目を転じれば、高度経済成長という言葉が登場し、「三種の神器」といわれたテレビ、電気冷蔵庫、電気洗濯機が、各家庭に洪水のように

なだれこんでいた。

そんな「政治」と「経済」の季節に読んだ『忘れられた日本人』に、私は子どもながら言い知れぬ衝撃を受けた。世の中は政治に過熱し、経済に浮かれているというのに、この著者はそうした時代風潮に背を向け、辺陲の地に生きる名もなき庶民の話にじつと耳をかたむけている。

私はまず、その「反時代性」にしばれた。とりわけ、その本のなかの一篇の「土佐源氏」の読後感は圧倒的だった。

この作品は、宮本が土佐山中の禰原（めはら）という寒村で出会った盲目の元馬喰（めくらう）が語った女性遍歴の物語である。冒頭の場面を紹介しよう。

いろりには火がチロチロと燃えていた。そのそばに八十をかなりこえた小さな老人があぐらをかいてすわっている。いちじく形の頭をして、歯はもう一本もなくて頬はこけている。やぶれた着物の縞もろくに見えないほどよこれている。



宮本常一（撮影／芳賀日出男）

ここは土佐の山中、禰原村。そしてこの老人のこの住居は全くの乞食小屋である。ありあわせの木を縄でくくりあわせ、その外側をむしろでかこい、天井もむしろで張ってある。そのむしろが煙でまっくらになっている。

天井の上は橋。つまり橋の下に小屋掛しているのである。土間に糞がらをまいて、その上にむしろをしいて生活している。入口もむしろをたれたまま。

時々天井の上を人の通っていく足音がきこえる。寒そうな急ぎ足である。

盲目の元馬喰は、こう言って長い身の上話を終える。



宮本常一の旅の原風景 白木山からの周防大島

「ああ、目の見えぬ三十年は長うもあり、みじこもあつた。かまうた女のことを思いだしてのう。どの女もみなやさしいええ女じゃった」

この哀切なモノローグを読んだとき、人を感動させる作品は、「安保反對」や「高度経済成長」といった「記号」ではなく、活字だけで世界がくつきり浮かびあがり、切れば血が出る「言葉」によってしか成立しないということが、子ども心にもぼんやりわかった。

その違いを「大文字」と「小文字」という言葉で説明できるようになったのは、ずっと後になってからである。

『忘れられた日本人』から、私のいまの仕事につながる大事なことを教えられたのは、「語って説かず」ということだった。宮本は『忘れられた日本人』で語るだけ語り尽くして、決して説こうとはしていない。

その恰好の例が、やはり同書に収められた「梶田富五郎翁」である。これは対馬の寒村に漁港を開いた一開拓漁民のライフヒストリーである。

昭和二十五（一九五〇）年夏、宮本は民俗調査のため、朝鮮半島をのぞむ対馬を訪れた。宮本はそこで、対馬南端の浅藻という集落に自分と同じ周防大島出身の老漁師が住んでいることを知る。

物語は日差しのきつい日、梶田富五郎という八十過ぎの老人を宮本が訪ねて行くところから始まる。富五郎は同じ瀬戸内海出身の宮本の来訪を目を細めて喜び、三つのとき両親に死なれ、明治のはじめ、七歳のとき対馬に渡ってきたとこのことから話し始める。

宮本は八十過ぎの富五郎を七歳の

少年の心理に立ち戻らせ、対馬に渡る航海の魅力を実に生き生きと語らせている。

どつちを向いても波ばかりで、船はちつともじつとしちやおらん。どだいゆりあげられたりゆりおろされたり、子供心にもこりアたまらん思うて、船ばたをじいっとつかまえて、そのまア大けな波ばかりを見ちよつたもんじゃ。大人はそれでもえらいもんで、その大波の上を櫓を押して行くんじゃ。

船べりをしっかりつかまえた富五郎少年のちつちやな手と、大波に驚嘆して感動に輝く目が見えるようである。

対馬にたどりついた富五郎たちは、無人の土地を開拓してそこに港をつくりはじめる。入江に沈んだ石を、潮の干満差を利用して一つ一つ外海に運び出すという気の遠くなるような作業である。

人間ちつものは知恵のあるもんで、思案の末に大けな石をのけることを考えついたわいの。潮がひいて海の

浅うなったとき、石のそばに船を二はいつける。船と船との間へ丸太をわたして元気のええものが、藤曼でつくった大けな縄を持つてもぐつて石へかける。そしてその縄を船にわたした丸太にくくる。潮がみちてくると船が浮いてくるから、石もひとりてに海の中へ浮きやしよう。そうすると船を沖へ漕ぎ出して石を深いところへおとす。船が二はいで一潮に石が一つしか運べん。

港らしいものが出来たのは、作業を始めて三十年後のことだった。

宮本は富五郎にこれまでの人生を余すことなく語らせ、最後までこう言わせている。

「やっぱり世の中で一ばんえらいのが人間のようでこいす」

辛苦の末に新しい漁村を切り拓いた富五郎のこの力強い一言は、まさに「小文字」言葉の典型であり、「語って説かず」の見本である。

不透明さだけが増し、先行きが多たく見えない現在の日本社会は、恐ろしいほどの閉塞感に覆われている。派遣社員ばかりか正社員まで容赦なく首切りし、毎年三万人の自殺者が出

るこの国は、完全に社会の底が抜けてしまった。

もつと言うなら、日本社会は一種の「内戦状態」に突入したといえるのではないか。自殺者三万人という数字は、阪神淡路大震災クラスの大地震が一年間に五回起きている計算である。そのとき、日本列島の津々浦々に生きる名もなき庶民の生活を記録し、明るく励まして歩いた宮本の生涯は、宝石のような輝きを帯びて迫ってこないだろうか。

宮本はこんな言葉を残している。

「樹をみろ、いかに大きな幹であっても、枝葉がそれを支えている。その枝葉を忘れて、幹を論じてはいけな

い。その枝葉のなかに大切なものがある。学問や研究はあくまで民衆や庶民の生活を土台に築き上げるものだ」

宮本の残したおびただしい著作と写真は、滾々と湧き出る源泉のように、われわれに生きる勇気を与える力強いメッセージでありつづけている。



宮本常一のまなざし
(みずのわ出版)



■佐野 眞一 (さの・しんいち)

1947 (昭和22) 年、東京生まれ。早稲田大学文学部を卒業後、出版社勤務を経てノンフィクション作家に。'97 (平成9) 年、民俗学者・宮本常一と渋沢敬三の交流を描いた『旅する巨人』で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。その他の著書に『宮本常一のまなざし』『宮本常一が見た日本』『甘粕正彦 乱心の曠野』『沖縄 だれにも書かれたくなかった戦後史』などがある。